

[2024年2月26日開催]

<サロン事務局>

第3回革新的製品創出サロン（延期分）開催後記

「クールアース」の統一テーマで、近畿大学農学部の松本教授より「気候変動と森林 ～森林管理と木材利用が地球を救う」のご講演を拝聴した。（本開催は前回、11月30日に予定されていたが、講師ご都合により24年2月に延期されたもの。）その後、同会場のコーナーにて、ネットワーク構築の一環としてワンコイン交流会を開催し予定通り終了。次回は第5回（3月14日）を予定。

★ご講演「気候変動と森林 ～森林管理と木材利用が地球を救う～」

講師 近畿大学農学部 環境管理学科 森林資源学研究室 教授 松本 光朗氏

・日本は国土の7割が森林。うち4割がスギやヒノキなどの人工林で、そのおよそ半分は伐採適期を迎えている。

Q: サロン会員企業が先入観から、尋ねたい典型的疑問は以下であった。

疑問 **せっかく二酸化炭素を吸収してくれている森林を、伐ってしまって大丈夫か？**

A: それに対し以下の4点で大丈夫とする(ものづくり企業としては目から鱗の)結論を拝聴した。

→解答 A1

高齢木よりも、若い木のほうが炭素の吸収量が多い。伐採適期を迎えた高齢木を伐って木材として長く利用することで炭素を蓄積し、再造林して若い木をしっかりと育て、吸収量を増やせる。

→解答 A2

天然林や生物多様性の高い森、防災林や水源かん養林など保全林として管理し守るべき森と、林業のために育ててきた人工林を 区別し伐採する。

→解答 A3

樹齢50年を超えて、二酸化炭素の吸収量も落ち、木材としては、伐採適期となった大径木をしっかりと国内で活用できる道筋をつけること。伐って、木材を利用し、植えて、育てる流れがうまく循環すれば、林業は健全な産業となる。

→解答 A4

温室効果ガスを増やしてしまう材料ではなく、温室効果ガスを減らす役割をする木材を生活資材、道具の素材としてより多く使うことで、炭素を木材として暮らしの中に貯めていくことができる。

スギ林1haが吸収する年間炭素量

20年生前後：約3.3炭素トン

40年生前後：約2.3炭素トン

60年生前後：約1.1炭素トン

80年生前後：約0.8炭素トン

出典 「森林と気候変動」公益社団法人 国土緑化推進機構 発行
(松本先生お薦め)

続々と建設される木造ビル



東京海上日動ビル本館・新館の建て替え(竣工2028年)



三井不動産と竹中工務店により日本橋にて進められている木造賃貸オフィスビル(竣工2025年)



京橋第一生命ビルの建て替え(竣工2025年以降)

◆木造高層ビルはすでに実用化がはじまっている。鉄骨やコンクリートに負けない強度を木材にもたせたCLT*や大断面の集成材といった新しい木質材料が開発され、木造高層ビルが日本を始め、世界中で建築され脚光をあびている。

CLT*：直交集成板。ひき板の層を繊維方向を直交させ、積層接着した厚板。

(左図：松本先生ご講演配布資料)

★ワンコイン交流会

ご講演終了後ネットワーキング活動として、講師を囲みワンコイン交流会を実施し17時30分閉会、次回の第5回サロン（3月14日）は台湾 IMC 企業グループを迎えての開催を予定。 (以上)